

日本獣医師会の国際貢献 アジア研修事業の役割と今後の展望

今回の国際ピックアップニュースでは、日本獣医師会が実施しているアジア地域臨床獣医師等総合研修事業（以下、アジア研修事業）についてご紹介します。140ページに研修参加者が書いた報告が掲載されていますのでそちらもご覧いただけますと幸いです。

■ ■ ■ 日本獣医師会の活動における アジア研修の意義

アジア獣医師会連合（FAVA）加盟国を中心に、アジア各国の獣医師へ1年間の研修機会を提供している本事業ですが、起源を辿ると平成4年度から10年間に亘り実施された「国際獣医師育成研修事業（日本中央競馬会特別振興資金助成事業）が元になっています。10年間で144名がこの研修に参加しました。そして藏内会長が2015年のFAVA総会（ウランバートルにて開催）に参加した際、当時のモンゴル獣医師会長であったツェデブ・オルズィートクトフ先生らアジア研修事業のOB/OGから、「若手獣医師の研鑽のため本事業を再開して欲しい」という熱い要請を受けました。幸いにもJRAのご支援を再び受けることができ、2016年から現在まで、アジア研修は日本獣医師会の国際貢献活動の一つの柱として続いております。

アジア研修事業は、①アジア各国で家畜感染症の防疫を担う獣医師のスキルアップ、②日本とアジア諸国の獣医師とを結ぶ友好的なネットワークの形成、この2点を目標としています。令和7年度は国内獣医学大学のうち、帯広畜産大学、酪農学園大学、北海道大学、北里大学、岩手大学、東京大学、東京農工大学、麻布大学、日本大学、大阪公立大学、山口大学、宮崎大学、鹿児島大学のご協力を得て、14名を受け入れます。世界の

獣医師会との国際交流は藏内会長のFAVA会長就任（2022～2024年）、WVA会長就任（2026～2028年）との相乗効果で、非常に活性化しております。

■ ■ ■ アジア研修事業から広がる国際協力

前項でご紹介した経緯を経て再開されたアジア研修は、途中コロナ禍で2年間の中断があったものの、これまでに6回開催され77名が修了しています。ここ数年の参加者をみまると、このような傾向がみられます。

- 台湾・韓国では小動物分野への就業志向が強く、本研修への応募者は少ない
- 小動物分野の隆盛がみられるのは東南アジアも同様だが、同時に国内外の食肉需要に応えるため畜産が急拡大しており本研修への根強いニーズがある
- ミャンマー、キルギス、ネパールでは畜産が発展途上にあり、本研修への参加意欲が非常に高い

別表には過去と現在のアジア研修事業参加者数の集計をまとめております。

東南アジア、特にタイ、ベトナム、インドネシアでは鶏肉と豚肉の生産規模が伸びており、同時に家畜感染症のリスク管理が重要な課題となっています。防疫に携わる獣医師の重要性はかつてなく高まっています。日本獣医師会では、アジア各国で家畜感染症の防疫技術水準が向上することで、日本の畜産振興に貢献できることを期待してこの事業を継続しています。

■ ■ ■ 課題と今後の展望

これまで200名以上の獣医師がアジア研修を

表 国・地域別アジア研修参加者人数（修了者）

国・地域	平成 5～ 14 年度	平成 28～ 令和 6 年度
台 湾	1	4
韓 国	15	4
インドネシア	12	6
フィリピン	13	7
マレーシア	1	4
タ イ	22	7
ベトナム	11	8
モンゴル	19	6
スリランカ	15	7
バングラデシュ	8	4
ミャンマー	0	5
ネパール	0	5
キルギス	0	6
そ の 他	27	20
催行回数と のべ人数	10 回 144 名	6 回 77 名

注) 事業開始初年度は受入準備期間だったため、実際に研修生が来日した平成 5 年及び 28 年度以降の参加者数で集計しています。

修了してきました。参加者一人ひとりのスキルアップという目標は達成できていますが、個々の獣医師という点をいかに線として、また網としてつなげて活用していけるかが今後の課題です。その解決に向けた第一歩として、昨年 11 月にはタイ・バンコクのチュラロンコン大学にご協力いただき、本事業の修了者を集めた合同発表会を開催しました。この会には平成 28 年度以降の参加者のうち 14 名が集まり、近況を報告し合うとともに、異なる年度の参加者間でも交流を深めました。

2026 年 4 月に開催される第 41 回世界獣医師会大会（WVAC2026）ではアジア研修にご協力いただいた先生方、研修修了者にお集まりいただきシンポジウムの開催を企画しております。人材育成という成果が出るまで長い時間を要する事業に根気強くご協力いただいている JRA、専門教育を実施いただいている各大学、そして日本獣医師会の国際活動へのご理解とご支援をいただいている各地方獣医師会と構成会員の皆さまに、この場をお借りして深謝申し上げます。皆さまには WVAC2026 において、アジア研修の成果をぜひ直接ご覧いただきたいと思っております。